第1特集
生徒・仲間にすすめたい
「私の本棚」
英語教師の
この1冊

小学校教員のためのこの1冊
～常に先行が求められる～

三田祐太 Mita Yuta（東京都青梅市立第五小学校主幹教諭）

学習指導要領は10年毎を目安に改訂されている。しかし，施行には小中高で若干のずれがあり，小学校から本格実施し，中高と数年間かけて新学習指導要領へと移行していく。つまり，小学校教員が先行して新学習指導要領の指導をしていくことになる。本稿では，常に先を求められる小学校教員仲間にすすめたい私の本棚を紹介する。

✣「小学校教員を目指す人のための外国語（英語）教育の基礎」（髙橋和子，佐藤玲子，伊藤摂子著，明星大学出版部，2018）

現在の小学校教員は，大学時代に外国語教育指導法の授業を受けていない者が大半を占める。本書は初めて外国語（外国語活動）を指導するそうした小学校教員にもおすすめしたい1冊である。授業を行う順番でページが進むので，実際に授業をしているように感じられる。UNIT 1 では ALT とのやり取りに関するページがある。UNIT 13 では ALT と次週の授業の打ち合わせをする様子が書かれている。Column では下のような実用的なポイントが取り上げられており参考になる。

①ALT との打ち合わせはいつするのか？
②授業で使う名札の作り方のコツ
③「休み時間」は英語で何て言うの？
④子どもの文法的誤りを直す方法の1つは…
⑤Small Talk はたいへんだから ALT にお任せ？
⑥It's raining. と It's rainy. の違いは？
⑦日付はどのように書いたり言ったりするの？
⑧他教科と連携した指導のあり方

さらにこの本は指導者の英語力向上を目指している。音声 CD も付属していて，正しく発音ができたらチェックする欄が設けてあり，読者の定着度を測ることができる。UNIT のはじめには必ず発音練習があり，教師が英語の発音練習をすることができる。それぞれの UNIT で活動例が示されているが，大きなイラストとともに記述されているので活動が容易に想像できる。この本を読み終わった後は，自信をもって外国語の授業ができるようになるだろう。

✣「小学校新学習指導要領の展開　外国語活動編」（吉田研作編著，明治図書，2017）

学習指導要領の解説書は数多く出版されているが，高学年の外国語科の内容がメインになっているものが大半である。本書は外国語活動編ということで，中学年に特化した内容になっている点が特徴である。さらに学習指導要領や解説編を見ただけでは理解しにくい部分をわかりやすく解説してあるのもこの本の特徴である。序章の「外国語活動導入のキーポイント」では導入の経緯や基本方針が書かれており，初めて外国語活動を指導する教員にとっては参考になる部分が多い。

3章もこの本でおすすめしたい箇所だ。「外国語活動の新授業プラン」という章だて，第3学年で6本，第4学年で5本の授業案が示されている。第3学年「My 昆虫図鑑を作ろう」は，理科の授業を関連させたプランになっている。外国語活動でよく行う買い物ゲーム等の形式で昆虫集めをするという活動だ。新たな活動をするのではなく，一度行ったことのある活動をリメイクすることで，教員も児童も負担なく活動に参加することができる。第4学年「東京の水について説明しよう！」は，社会科の副読本の内容と関連させたプランになっている。社会科の副読本にある写真資料を使って，東京の水源や河口，浄水場について，3年生の児童が使える英単語のみを使用して活動を行い，自分たちの地域のことを世界に発信する喜びを味わう単元構成になっている。その他の新授業プランは以下の通りである。

○聞くことの新授業プラン
「Do you like ice cream?」
○話すこと［やり取り］の新授業プラン
「I like blue.」
○話すこと［発表］の新授業プラン
「私たちはこんな班！」
○聞くことの新授業プラン
「おすすめの文房具セットをつくろう」
○外国語へつながる新授業プラン
「アルファベットで文字遊びをしよう」

✣シリーズ新しい学びの潮流4「しっかり教える授業・本気で任せる授業～多様な道筋で豊かな学力を保障する～」（奈須正裕，齊藤一弥，佐野亮子著，ぎょうせい，2014）

最後に紹介する本は，教育全般に関する本である。私が指導する中で，この本には今までになく大きな影響を受けた。今まで自己流で行っていた自分の指導に大きな自信と変化を与えてくれた内容であり，今でも読み返しては新たな発見がある。本来の教育とはどのようなものなのか，これからはどのような教育が本当に必要なのかについて，たくさんのヒントをくれる内容である。

第2章「しっかり教える授業」は，一見現在の学習指導要領の内容とは逆に思えるタイトルであるが，実際はそうではない。「教え込む」と「しっかり教える」は全く別物だということを教えてくれる。授業づくりの3つの要素として，①単元づくりの「勘どころ」，②子どもの問いづくりへの「知恵」，③学びを描く「技」を挙げている。勘どころの記述の中に「専門職としての教師」という言葉がある。教員は授業を指導して学力をつけることが第一である。しかし，それ以外にも生活指導や，保護者との良好な関係の構築，地域や他校種との関わりも大切である。あまりにも多岐にわたる業務があるため，世間的にも，場合によっては教員自身も「専門職」という認識が薄れているように感じる（よろず屋のように何でも対応している／してくれるように感じる）。しかし，教科の専門性や指導力を高め，魅力ある授業を行うことこそ，教員の本分である。この章全体を通して「専門職」という言葉の意味を学ぶことができ，教員が指導にプライドをもって取り組む意欲が湧き出てくる内容である。

第3章「本気で任せる授業」，このタイトルを見て以来，私自身は毎日頭の中でこの言葉を唱えてから授業を行っている。この章の著者である佐野亮子先生には，以前私の授業についてご指導をしていただき，様々なアイデアをいただいた。年間にわたり指導助言をいただく中で，佐野先生の目指す指導法がこれからの日本の学校教育に大きな変革を与えることを確信した。具体的には複数教科同時進行・単元内自由進度学習という授業の仕組みを教えていただいた。初めて聞いた時には，今までの一斉授業とはあまりにも手法がかけ離れていて理解するのに相当な時間がかかり，授業を始める前に佐野先生にたくさん質問をしたことを覚えている。

そのやりとりの中で，先生は「まずはやってみましょう」とおっしゃったのが印象的だった。半信半疑の中で，当時担任をしていた小学6年のクラスで実践を重ねていった。結論から言うと，それまで見たことのない子どもたちの表情や，学習に対する前向きな態度を見ることができた。この章の中では，そのプロセスが細かく書かれているのでぜひ参考にしてほしい。子どもたち自身が学びに向かう姿勢を身につけ，自分の学習したいことを好きなときに学習する。そのような環境での学習で得たことは，子どもたちの中に生き続けるのである。先生が「まずやってみよう」とおっしゃった意味がその時，わかったような気がした。

＊　＊　＊

2020年度から本格実施された小学校学習指導要領。約10年という改訂の期間の中で，もうすでに2030年度を見据えた新しい教育を考えなければならないのかもしれない。それは小学校教育から考えていくことになるのであろう。現場にいる教員は本やインターネット，先行研究や実践を通じて学べるよう，常に高いアンテナを張らなければならない。

☺この秋にある展覧会に向け，高学年の担任なので家庭科の被服作品の指導をしています。（三田）